

2020～2021年度なにわ大阪研究センター研究プロジェクト「SPレコード（松本コレクション）のデータベース作成と分析」

著者	米田 文孝, 橋寺 知子, 官田 光史, 篠塚 義弘
雑誌名	なにわ大阪研究
巻	4
ページ	81-84
発行年	2022-03-31
URL	http://doi.org/10.32286/00026343

2020～2021年度なにわ大阪研究センター研究プロジェクト

「SP レコード（松本コレクション）の データベース作成と分析」

研究代表者 米 田 文 孝

研究分担者 橋 寺 知 子 官 田 光 史 篠 塚 義 弘

当研究プロジェクトでは、「SPレコード（松本コレクション）のデータベース作成と分析」と称して、関西大学が大阪音楽大学から2017年度に寄贈を受けたSPレコード群について、2020年度から2021年度までの2年間に体系的に分類・整理を行い、そのデータベース作成とレコード音源に付随する当時の時代背景や風俗などを研究した。SPレコードは、音源としての価値だけではなく、録音・記録された当時の時代背景や世相・風俗などを知る上でも、非常に貴重な資料である。その結果、寄贈を受けたレコード群の総数や保存状態など全体像を把握することができ、大正から昭和初期頃までの関西圏モダニズムについて、当時のレコード音源から研究することができた。そして、レコード群の中から関西大学女子学生第1号である北村兼子が自ら吹き込んだレコード『主張 怪貞操』を発見することもできた。

以下に2年間における活動概要を述べる。なお、詳細については、別途報告書を作成するのでご参照願いたい。

1. はじめに

SPレコードとは、天然樹脂シェラックを主原料とした平円盤状の媒体に音源を記録したものである。このレコードは重くて硬いが割れやすく、カビが発生することもあり取り扱いや保存に注意が必要であった。直径12インチ（約30cm）円盤の片面に、音源を約4～5分記録することができる。その後、1948年頃には軽くて割れにくい塩化ビニールを主原料とした長時間記録可能なLPレコードが発明され、従来のSPレコードを席卷した。LPとはLong Playingの略であり、LPの発明により従来のレコードを日本ではSP（Standard Playing）と呼ぶようになった。

松本コレクションとは、伊丹市在住であった松本正美氏（故人）が、主に大正時代から昭和中期にかけて日本国内で販売されたSPレコードを蒐集したものである。蒐集分野は、講演・朗読に始まり、歌舞伎など日本の伝統的な芸能から、歌劇、流行歌、ジャズ・ポピュラーなど幅広い。松本氏は、これらのコレクションを自らの考えに基づき分類をして手書きのノートに記録していた。コレクションは大阪音楽大学が松本氏のご遺族から寄贈を受けたものを本学が引き継いだもので、このコレクションノートも含まれていた。当研究プロジェクトでは、蒐集者の意志を尊重し、この分類にそってデータベースを構築することにした。

2. 研究分担と活動概要

当研究プロジェクトでは、博物館事務室・学芸員の篠塚義弘が「SPレコードの整理・分類、データベース構築と関西大学との関連」、環境都市工学部准教授の橋寺知子が「宝塚歌劇と大正・昭和初期の阪神間モダニズム」、文学部准教授の官田光史が「昭和初期の関西のメディア・イベント」を担当し、文学部教授の米田文孝が全体を総括することにした。

以下に、各時期における活動概要を述べる。

[2020年度春学期]

2020年2月頃から世界的に広がった新型コロナウイルス感染症の影響で、4月から約2ヶ月間の大学構内立入り禁止期間が設けられるなど計画変更を余儀なくされた。7月から11月にかけてSPレコードの整理・分類と基礎データの作成を行った。

SPレコードは、約80箱のダンボールに保管されていた。何度かの保管場所移転を経たため、コレクションノートとの照合は不可能と判断し、まず、レコードを分類することから始めた。コレクションノートの分野毎に大まかに分類した上で、レコード・レーベル毎に仕分けし、レコード番号順に整理した。次に、レコード・レーベルの画像を事務用コピー機のスキャナ機能を利用してパソコンに取り込んだ。同時に、割れ、ヒビ、汚れなどレコードの状態も付箋を用いてレコード・レーベルのスキャナ画像と共に記録した。この結果、寄贈を受けた松本コレクションのレコード総数が4,086枚であることが判明した。レコード・レーベル画像があれば、貴重なレコード本体を用いなくても、基礎データを入力することができる。



写真1 SPレコード整理・分類作業1



写真2 SPレコード整理・分類作業2



写真3 レーベルのスキャナ作業



写真4 基礎データ入力作業

スキャナ作業と並行して、レコード・レーベル画像を用いた基礎データ入力作業を行うにあたり、入力要領を作成して、入力順序や記載項目の統一を図った。

以上の作業の詳細については、2020年11月21日(土)13:30~16:00に、かんさい・大学ミュージアム連携実行委員会主催のZOOMによる座談会「近代遺産の発掘と活用 寄贈資料を引き継ぐ～SPレコード～」(文化庁「令和2年度文化庁地域と協働した博物館創造活動支援事業」)で報告した。座談会の参加者は、55名(ZOOM参加48名)であった。

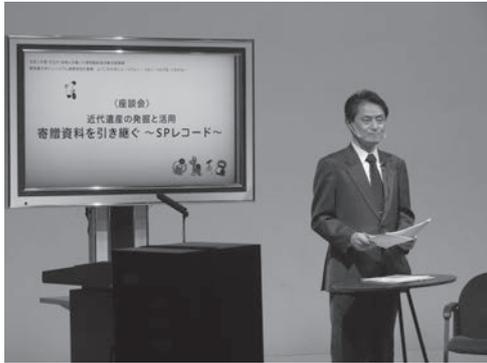


写真5 ZOOMによる座談会1

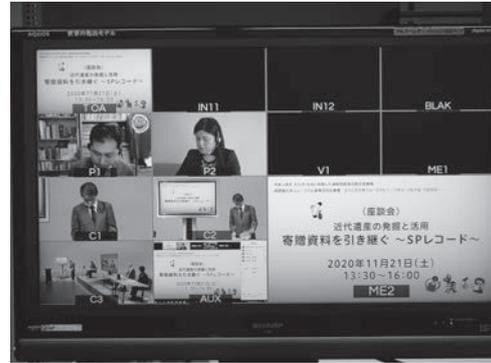


写真6 ZOOMによる座談会2

[2020年度秋学期~2021年度秋学期]

2020年11月頃から、当研究プロジェクトでは、この膨大な基礎データを基に詳細項目への抽出作業を順次行った。なお、分野毎に詳細項目のデータベースを作成するにあたり、研究分担者が担当する分野を優先して作業を進め、研究活動に支障がないよう配慮した。

2021年11月20日(土)13:00~16:00に、2年間の研究成果報告会をSPレコードのお披露目演奏会を兼ねて、なにわ大阪研究センター1階セミナー室にて開催した。当日の参加者は23名であった。

3名の研究分担者による報告を簡単に記す。

- ・篠塚義弘「データベースの作成と北村兼子のレコード『怪貞操』発見」

先ず、SPレコード群の整理・分類の方針と具体的な作業手順について報告した。作業を通じて、本学女子学生第1号として知られる北村兼子が自ら吹き込んだレコードを発見し、レコード発売会社の新譜情報などを入手して、発売時期の確定なども行った。報告会では、北村兼子の紹介を行った上で、単行本との関係にも言及し、今回発見した彼女の肉声レコードである『主張 怪貞操』を披露した。



写真7 研究成果報告会1



写真8 研究成果報告会2

・橋寺知子「宝塚少女歌劇 ― 大正・昭和初期のエンターテイメント空間 ―」

1914年に小林一三が創設した宝塚歌劇に注目し、公演のレコードとともに、歌劇場の建物（プールを利用したパラダイス劇場、公会堂劇場、中劇場、改装前後の大劇場など）の変遷や当時流行した風俗にも着目し、報告した。大正期以降、宝塚に出現した施設群は、小林一三の考える新時代の娯楽場であった。歌劇場のあゆみを写真等で探ると同時に、そこで演奏された歴代の宝塚歌劇の楽曲をSPレコードで聴き、大正期から昭和初期のエンターテイメント空間の追体験を試みた。

・官田光史「『黒潮行進曲』の誕生 ― 戦時期和歌山のメディア・イベント ―」

松本コレクション中の懸賞募集当選歌について概観を行ったのち、日中戦争期（1940年）の作品である『黒潮行進曲』（西川好次郎作詞、深海善次作曲）を取り上げた。この作品の歌詞は紀勢線の全通記念として、大阪毎日新聞和歌山支局によって募集された。その募集、当選歌詞の発表、作曲の完成、発表会（於・和歌山市、新宮市）の開催は連日新聞で伝えられ、和歌山県民の関心を集めた。その意味において、『黒潮行進曲』の誕生はまさにメディア・イベントであった。

3. おわりに

今回、約4,000枚にのぼるSPレコード群を整理し、データベースを作成することができた。この結果、松本コレクションのSPレコードをタイトル名やレコード番号などで検索し、容易に探し出すことが可能となった。しかし、細かな項目については、今後も引き続きチェックする必要がある。また、レコードに付随する歌詞カードなども多数存在しており、これらの中にも貴重な情報が掲載されているので、今後の調査を期待したい。

SPレコードを当時のゼンマイ式蓄音機で再生すると、臨場感を感じる事ができる。松本氏のコレクションノートに「歌の不思議さは、その時代の風景や匂いを抱いていることである。…」と著されていたように、録音・記録された当時の時代背景や世相・風俗などを知る上で、非常に貴重な資料である。そして、資料としていつまでも生き続けさせるためにも、後世への適切な保存が必要である。

（よねだ ふみたか 関西大学文学部教授）

（はしてら ともこ 関西大学環境都市工学部准教授）

（かんだ あきふみ 関西大学文学部准教授）

（しのづか よしひろ 関西大学博物館学芸員）